

「異己」理解共生を旨とした教育実践研究

釜田 聡*

(平成29年10月11日受付；平成29年12月7日受理)

要 旨

本研究は、JSPS科研費17H02696（基盤研究(B)）「日・中・韓三カ国協働による「異己」理解共生を旨とした国際理解教育のプログラム開発」（以下、異己プロジェクト）の基礎的研究に位置付く。本研究では、異己プロジェクトの先行研究や関連研究の成果と課題を洗い出すことによって、異己プロジェクトの特質を浮き彫りにし、今後の研究の方向性を確認することを研究目的とする。

本研究では、最初に異己プロジェクトの研究経緯を整理した。次に異己プロジェクトに関連する研究を選定し、異己プロジェクトの目的に照らし合わせて、その特質を明らかにした。

研究の結果、これまでの先行研究、関連研究においては、東アジアの児童・生徒の価値観の差異に注目する実践研究が多いことが確認された。しかし、授業実践の中で、傷ついた関係の修復や共生へのアプローチについては十分な実践研究の蓄積は確認できなかった。そこで、異己プロジェクトの特質・意義は、共生へのアプローチを授業実践プログラムの中に組み込むことにあると指摘した。

KEY WORDS

異己 IKO (Otherness)

教育実践 Practice of education

国際理解教育 International understanding education

1 問題の所在

本研究課題設定の理由について、異己と国際理解教育と異己プロジェクトと先行研究の視点から述べる。

1. 1 異己と国際理解教育

1. 1. 1 異己とは

姜英敏（2014）によると、「異己」は紀元前3世紀の『後漢書』に初めて記載された言葉で、中国では、現在も広く使われている。価値観が異なり、政治的に対立あるいは敵対する立場にいる派閥、武装勢力、利益集団が互いを「異己」と称し、肅正の対象として看守されてきた。この場合、単に「敵」ではなく、「異己」を使う理由は、「異己」の持つ弁証法的特長が「敵」では表現できない、特殊な意味をもつからである。特殊な意味とは、次の三点である。

- ・「異己」と称すのは同じ集団の中において、お互い避けられない場合に限定する。
- ・利益や価値観が異なる集団間でそれに伴う違和感や敵対関係が構築される状況をさす。
- ・政治闘争の中で「異己」がすべて肅清されることは異なる考えをもつ相手が存在しないことをも意味し、そのような絶対的支配はかえって自分の存続に危機をもたらすことになるので、自己集団存在の前提として「異己」は常に存在する。まさに、文字とおり「異なる自分」ともいえる。

とりわけ中国では、複数の政治・武力・利益集団同士が対立関係にあった場合「異己」という言葉を使用してきた。

価値多元化社会において異なる価値観や立場を持つ相手を理解し、その相手と共生社会を作っていくという国際理解教育の原点に戻ってみても、「異己」理解と「異己」との共生を目指す国際理解教育の授業開発は重要な課題といえる。日本の教育実践研究の分野では、この異己の概念を研究テーマに組み込んだ研究は管見する限りみられない。

1. 1. 2 異己と国際理解教育

本研究は、2007年7月にユネスコアジア文化センターの研究助成を受け、札幌で開催された「日韓中三カ国相互理解のための教材開発ワークショップ（以下、札幌WS）」の教育実践研究の潮流に位置付くものである。

札幌WSでは、韓国6名、中国5名、日本22名の計33名が参加して、「日韓中ラーメン物語」や「日常生活と生活文化」などの5つのグループに分かれてカリキュラム・教材の開発を行った。

その時の議論を踏まえて、2009年科研プロジェクト「日韓中の協働による相互理解のための国際理解教育カリキュラム・教材の開発」（以下、三カ国科研）が立ち上がった。

この三カ国科研は、「日韓中の食文化－ラーメン・コメ」グループ、「日韓中の人間関係－家族関係」グループ、「人の移動(1)－移民」グループ、「人の移動(2)－旅行」グループの4つのグループに分かれ、単元開発や教材開発に取り組んだ。『日韓中でつくる国際理解教育』（明石書店）は、この科研プロジェクト3年間の研究成果でもある。この研究成果の特質は次の三点である。

- (1) 東アジア情勢を踏まえ、また共通教材の汎用性を考え、子どもたちの身近な事象を重視した。つまり、政治外交上の論点になる課題を排除しつつ日韓中で協働研究、協働実践が可能な事象を抽出した。
- (2) カリキュラム・教材開発の対象は、子どもたちの発達段階を考慮しつつ、小学生から高校生を射程に入れた。
- (3) 開発したカリキュラム・教材は、原則的に三カ国で実践を行い、ブラッシュアップしている。

1. 1. 3 異己プロジェクト

以下、異己プロジェクトの概要を説明する。

異己プロジェクトは、2014年度日本国際理解教育学会・国際委員会のフリートーキングの場から生成されたプロジェクトである。当時の東アジア情勢、特に日本と韓国、中国との関係は、歴史認識や領土の問題、政治外交上、極めて厳しい状況であった。このようなときだからこそ、今こそ子どもたちと教育実践を磁場としてネットワークを構築すべきであると合意形成され誕生した。

現在は、釜田・姜英敏（北京師範大学）が中心となり、二つの外部資金¹⁾を得て、日本・中国・韓国の研究者と教育実践者が協働で進めている国際協働研究プロジェクトである。この異己プロジェクトで大切にしていることは、次のプロセスである。

最初に、同じ集団内で、自らと異なる集団・グループを「異己」ととらえ、その存在の認識過程と理解、さらには共生へのアプローチを体験する場を設定する。例えば、友人関係・友人間の所有物の概念が日本と中国、あるいは韓国と著しく異なることを事例にして、個人で考え、グループで考え、さらにクラスで話し合う。次に、国境を越えた仲間の話し合いの結果とその理由から学ぶ場を設定する。続いて、相互に意見交換を行い、「異己」の存在とその社会的・文化的背景を学ぶ場を設定する。

現在、児童・生徒の身近な日々の言動、生活習慣・価値観の相違からグループやクラス内の葛藤、さらには国境を越えた集団との葛藤、さらには「異己」との共生をどうすべきか、自らの意志決定と自己省察が問われている。

1. 2 異己プロジェクトと先行研究

異己プロジェクトは、図1のように札幌WSを源流として、その後の三カ国科研の研究の潮流に位置付く。さらに、そこに、姜英敏らの研究成果が流れ込み、結節点をつくった。これが異己プロジェクトの研究の潮流である。

姜英敏らは、国際理解教育の視点から「『異己』理解と共生」を国際理解教育の新しいアプローチとして提示し、実践を重ねてきた。特に日本と中国の小中学生や大学生を対象に「異己」理解を目的とする共同授業を何回か実施し、「異己」理解のプロセスを明らかにしながら、それを前提とした授業開発を目指した。しかし、これらの実践研究はいずれも、異己の存在を認識することにとどまり、異己とどのようにかわるか、異己とどのように共生すべきかの視点が欠如していた。

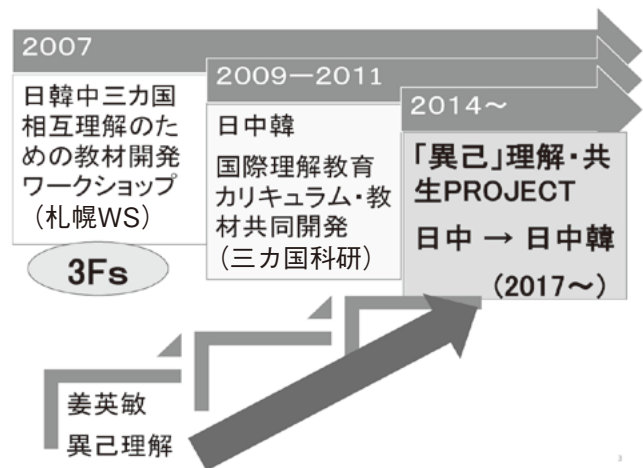


図1 異己プロジェクトの潮流
(筆者作成)

2 研究の目的と方法

2.1 研究の目的

本研究では、異己プロジェクトの先行研究や関連研究の成果と課題を洗い出すことによって、異己プロジェクトの特質を浮き彫りにし、今後の研究の方向性を確認することを研究目的とする。

2.2 研究の方法

最初に異己プロジェクトの研究経緯を整理した。次に異己プロジェクトの実践研究授業と関連する実践研究を選定し、異己プロジェクトの目的に照らし合わせて、その特質を明らかにする。

3 研究の結果と考察

3.1 異己プロジェクトの研究経緯

異己プロジェクトで、大切にしているプロセスは次のとおりである。

- ①クラス規模の集団内で、異己の存在を認識する。
- ②クラス規模の集団内で対話を行う。
- ③国境を越えた異己集団の存在を認識する。
- ④国境を越えた異己集団と対話を行う。
- ⑤異己との共生（かかわり方、理解し共に生活する）について話し合う。

以上のプロセスを組み込んだプログラム開発を行う。

つまり、「異己」理解だけではなく「異己」との共生にまで授業内容を広げることを射程に入れる。そのためには二つの段階に分けおのおの授業を展開する必要がある。初めの段階はコンフリクトに気付かせ、「異己」理解を試みることである。第二段階では双方の考えを基礎に、対立の立場を考慮しながら両国の生徒たちが共生を目指した共同作業を実施して試みるのが特徴である。

このようなコンセプトに基づき、プログラムを次のように作成した。

配付された次の学習シートを読み、各自の考えをまとめ、アンケートの各質問に答える。

【シナリオ】

武（たけし）さんと毅（つよし）さんは、中学生です。二人は2年1組に所属し、とても仲のよい友人です。二人が在籍する中学校では、2年生になると、修学旅行に出かけます。今年は、2泊3日の日程で東京に行くことになりました。次の【場面1】について、あなたはどのように思いますか、以下の設問に回答してください。

【場面1】

修学旅行の1日目の夜のことで、たけしさんとつよしさんが、夜の自由時間のときに、部屋の中で、家から持ってきたお菓子（おやつ）を出して食べてよいことになりました。それぞれのおやつを出して楽しく食べ始めました。つよしさんは、自分も持ってきたチョコレートを出して食べようと思いましたが、トイレに行きたくなり、部屋から出てトイレに行きました。しばらくして、部屋に戻ってきたら、つよしさんが出しておいたチョコレートが全部なくなっていました。つよしさんは、困った顔をして、たけしさんに「ぼくのチョコレート知らない」と聞きました。すると、たけしさんが、「ぼくが好きなチョコレートだったので、みんな食べたよ」と言いました。

【設問1】 たけしさんの行動についてあなたはどのように思いますか？

次の項目から自分に当てはまると思われる答えを選んでください。

- A ぜんぜん気にしない。仲良しなんだからあなたのもの、私のものと区別する必要がない。
- B 少し違和感はあるけど、問題にしない。二人の関係にも影響がない。
- C あまりいい気持ちではない。今度またこんなことがあると困る。
- D 不愉快、武の行動は理解しにくい。今後いいともだちにはしないほうがいいと思う。
- E その他 ()

【場面 2】

修学旅行 2 日目、たけしさんとつよしさんが、他の友人 2 名、計 4 名でグループごとに東京見学をしていたときの事です。昼食時間が近くなったので、中華料理のレストランに入りました。早速、中華料理のランチメニューを 4 名分を頼んで楽しみに待っていました。

麻婆豆腐やシュウマイ、チャーハン、焼きそば、スープなどが次々に出てきました。つよしさんは、4 人いるので、すべての料理を 4 人に均等になるように、小皿に取り分けようと思いました。すると、たけしさんは、「そんなことをしないでいいよ。好きなものを好きなだけ食べようよ。ぼくは麻婆豆腐が好きだけれど、チャーハンはあまり好きでないからさ」。これに対して、つよしさんは「でも、みんなで同じお小遣いを出したのだから均等にすべきだよ」と譲りません。

【設問 2】

あなたは、たけしさんとつよしさんのどちらの言動を支持しますか。

次の項目から自分に当てはまると思われる答えを選んでください。

- A たけしさんの言動を支持します。
- B どちらかといえばたけしさんを支持します。
- C どちらかといえばつよしさんを支持します。
- D つよしさんを支持します。
- E その他 ()

【場面 1】【場面 2】とも、日常の学校生活に着目した場面設定を行った。また、日本と中国、韓国との価値観の違いや判断基準が明確に分かれる「所有」の問題²⁾を設定した。次に、数時間での実践ができるようにと、設問を工夫し、選択肢を設定した。そうすることで、価値観と価値判断基準が可視化され、また多様な意見を類型化しやすくなると考えたからである。

授業実践については、これまで日本と中国（北京）の数カ校で授業実践を行った。本稿では、紙面の関係で、日本の実践のみを研究対象とする。学校名等は次のとおりである。

(1) 2015年度 中学校での実践

実践者：伊藤貴史教諭，実施校：N 県 K 市立 D 中学校，学年クラス等：1 年 1 組 35 名

(2) 2015年度 小学校での実践

実践者：堀之内優樹教諭，実施校：M 県 M 大学附属小学校，学年クラス等：6 年 1 組 35 名

(3) 2016年度 中学校での実践

実践者：田口秀行教諭，実施校：N 県 J 大学附属中学校，学年クラス等：2 年 1 組

(4) 2016年度 小学校での実践

実践者：堀之内優樹教諭，実施校：M 県 M 大学附属小学校，学年クラス等：4 年 1 組 29 名

(5) 2017年度 中学校での実践

実践者：津山直樹教諭・第一学年担任団，実施校：T 都 T 大学附属中等教育学校，学年クラス等：1 年生

3. 2 研究の結果

以下、授業実践研究の概要とその結果を記す。

3. 2. 1 伊藤実践

本実践では、【場面 1】を中心に行った。チョコレートを友人に食べられたことで、約 73% の生徒が不愉快（C・D を選択）だと回答している。一方で、北京の生徒の約 25% が不愉快（C・D を選択）だと回答した事実を知り、「理解できない」と回答する生徒がいた。このことは、まさに「異己」の存在、「異己集団」の存在を認識した状況である。その後、グループ内で意見交換をさせた。話し合いの内容は、おおよそ次のように分類できた。

○気付いたこと

- ・日本人はきちょうめんで中国人はおおざっぱな感じがする。
- ・中国人はけんかをしてあまり気にせず、自分たちで解決できそう。
- ・中国には友達に優しい人が多い。 など

○疑問に思うこと

- ・チョコレートを全部食べられて損した気持ちにならないのだろうか。
- ・友達に対してどんなときに怒るのだろうか。
- ・相手のことが普通に許せるのであれば、自分も友達に対して同じことを普通にするのだろうか。 など

こうした話し合いを踏まえ、北京の生徒と若干の意見交流を行うことで、価値観や判断基準の違いについて、理解を深めたことが確認された。一方で、そうした生徒とどのようにかかわるかなど、共生へのアプローチは確認できなかった。

3. 2. 2 堀之内実践①

堀之内実践は、第1次で、【場面1】【場面2】について、クラス内・グループ内で話し合わせた上で、北京の児童との交流を行い、その上で、次のステップについて考える場を設定した³⁾。

- ・【場面1】：遠足で持って来たチョコレートを勝手に食べてしまった友達をどのように思うのか。
- ・【場面2】：修学旅行で入った中華料理店。大皿に盛られた料理を均等に配分するか、各自好きなだけ食べるようにするか。

【場面1】では、児童の大半が「許せない」と答えている（CとD選択：85.7%）。また、【場面2】では、約7割の子供が均等に分けた方がよいと答えた。次に、なぜそのように考えたのか根拠を交流させている。

【場面1】については、お金を出して家の人に買ってもらった物だから、勝手に食べるのは良くないと、他人の物を勝手に使うのは良くないという意見が大半を占めた。

【場面2】では、「平等」ということが話題に挙がっている。

次に、「北京の友達（児童）はどのように考えたのだろうか」と投げ掛け、予想させた上で結果を提示した。

そこでは、全く逆の結果が出ていた。子供は驚きを隠せなかったようである。口々に「どうしてなんだろう」と対話を始めた。

子供から出された印象は、「心が広い」「優しい」「あまり厳しさが無いのかもしれない」「国によって考え方が違う」というものであった。また、疑問として「なぜ勝手に食べられても怒らないのか」「自分の物と他人の物を区別しなくてもよいのか」「相手が友達ではなかった場合でも許せるか」「区別しない方が友達と仲良くなれると考えたのはなぜか」等が挙げられた。

3. 2. 3 田口実践

田口実践は、これまでの伊藤実践と堀之内実践の実践研究の成果と課題、さらには北京の児童・生徒の意見や感想を踏まえて、学習過程を工夫している。

最初に、【場面1】【場面2】について、クラス内・グループ内で話し合わせた。その上で、「日常生活で、人とわかり合えないと思ったことはありますか?」と問い掛けた。結果は次のとおりであった。

- ・はっきり「はい」：5人
- ・「はい」：6人
- ・どちらでもない：5人
- ・どちらかといえば「いいえ」：17人
- ・「いいえ」：8人

次に、「どんな時にわかり合えないと思いましたか?」と問い掛けている。結果は次のとおりである。

- ・自分とは全く違う考え方をもっている人と話しているとき
- ・自己中心的に話したり、行動したりする人は、わかり合えないと思った。
- ・班活動とかで意見を聞いたとき、「何でもいい」と言われると、何を考えているのか分からないし、「わかり合いたくないのかな」と思う。
- ・どっちも強気で言っている時、自分の意見を強く持っている二人の場合。
- ・部活の時に、こう攻めた方がいいよと言われることがあったが、自分にもこう攻めてほしいというのがあるので、どうしても意見が合わない時がある。

田口教諭は、授業後のディスカッションで、「国と国の違い（日本と中国）の違いを浮き彫りにするのではなく、人によって、所有に関する考え方に違いがあることに気付かせ、その理由について考えさせることを重視したい」と語っている。異己プロジェクトの最初のステップである「異己」の認識を重視した授業実践として評価できる。

3. 2. 4 堀之内実践②

最初に、場面1のチョコレートの事例を、日中の子供たちに提示し、登場人物の言動をどのように受け止めるのか、アンケート用紙の選択肢から選び、日中の学級内で意見を交流した。次に、前時で行った自分たちのアンケート結果を昨年度実施した6年生、北京の5年生の結果と比較した。互いの判断をどのように感じたのか、また、その理由をどのように受け止めるのか意見を交流した。その上で、中国の友達へ質問をまとめ、学級写真とともに送付した。

堀之内実践②は、過去の先輩の考えや判断理由、国境を超えた北京の子どもたちの考え方や判断理由を児童に提示し、そこから学級内と国境を超えた友達との交流を促している。これまでの実践の成果と課題を踏まえ、短時間で異己の認識と的確な意見交流を実現している。

3. 2. 5 津山実践

津山実践の対象校は、グローバル化・国際化に対応したカリキュラムを独自に開発している中等教育学校である。また、生徒の中には、外国につながるのがある生徒が比較的多く、また海外留学の経験者が多いことから、テーマを「価値観の差異に気づこう！—異文化体験の語り合い—」とした。また、導入部分で、「これまでの異文化体験を語り、課題をみつけよう」と投げ掛け、これまでに自分が体験したり、感じた文化の違いとそこで考えた／考えられる課題を考えるように促した。

その後、【場面1】について、自分の判断と選択した理由を記入する場を設定した。また、その理由は、自分のライフストーリーのどのような部分と関係しているのかまで表現させた。津山実践は、【場面1】のチョコレートの事例のみで行った。特に配慮したことは、「普段、意識せずに考えていることを立ち止まって考え直すように促す（価値判断の源泉を認識させるように自己との対話）こと」を重視した。

3. 2. 6 姜英敏実践

姜英敏は、異己プロジェクトの前に、次の教育実践研究を行っていた。

- ・2007年7月から2008年6月にかけて日中韓国際理解教材開発の一環として日本の北海道江別市大麻小学校と中国の河南省鄭州市鄭州中学校付属小学校で実施した「お返し」をめぐる対話授業
- ・2008年4月日本の早稲田大学と中国の北京師範大学の学部生を対象に実施した「カツアゲ」をめぐる対話授業
- ・2007年から2009年にわたり日本の中央大学と中国の北京師範大学の大学院生を対象に実施した「所有と共有の意味とは」、「意見をダイレクトに述べるべきか」などの対話活動等

これらはどちらも対話を通して相互のコンフリクト気付かせ、それをめぐって深く議論させたものである。「『異己』理解」をめざす日中共同授業は、日中の生徒・学生たちが普段気づかなかった日中間の価値対立を可視化し、それについて深く議論する過程を通して、自分が「当然のことである」と思い込んでいる価値観や判断基準を省察し、相手の価値観や判断基準を理解することを目標としている。姜英敏はこのような実践研究を通じて、次のシナリオを作成して、異己理解の実践研究を進めてきた。

【事例】

Aさんが2歳になる娘のBちゃんを連れて団地の公園の砂場に出かけたときの事です。

Bちゃんはほかの子どもたちがBちゃんの持ってきた玩具で遊びたがると、取られることを警戒して一緒に遊びたがりませんでした。Aさんはそれはよくないと思って、いつも外にでるときはおもちゃをいっぱい持って出かけて、子どもたちにも配って一緒に遊べるように心がけました。家に帰るときにも他の子どもたちがBちゃんのおもちゃを返したがないことがあり、そのときはAさんはおもちゃをそのまま子どもに貸して家に持って帰らせました。

ところがBちゃんの玩具を借りて帰った親は、自分の子どものおもちゃと混じってしまっただけで返せなくなったり、返すのを忘れてしまったりして、結局Bちゃんのおもちゃが無くなってしまいました。そこでAさんはおもちゃに油性ペンで名前を書いて他の子どもたちに使わせてあげました。すると今度はAさんは他の子どもの親(Cさん)から「Aさん、何でそんなに私のもの、あなたのものと分けたがるの?」と言われてしまいました。

この事例は、姜英敏が日本への留学中に経験した日中の「所有」の差異と日本の「記名の習慣」について着目した事例である。いずれも、姜英敏本人が中国帰国後に直面した事例を教材化したものであり、異己プロジェクトの先駆的な実践研究として位置付く。

4 研究のまとめと今後の課題

本研究は、異己プロジェクトの先行研究や関連研究の成果と課題を洗い出すことによって、異己プロジェクトの特質を浮き彫りにし、今後の研究の方向性を確認することを研究目的とする。

最初に異己プロジェクトの研究経緯を整理した。次に異己プロジェクトの実践研究授業と関連する実践研究を選定し、研究の目的に迫った。以下、本研究の成果と課題を簡潔に述べる。

4.1 先行研究の検討と実践研究の成果と課題

これまでの先行研究、関連研究においては、東アジアの児童・生徒の価値観の差異に注目する実践研究が多いことが確認された。しかし、授業実践の中で、傷ついた関係の修復や共生へのアプローチについては十分な実践研究の蓄積は確認できなかった。

実践研究においては、実践を積み重ねることで、プログラム自体が精緻化されつつある。限られた時間の中で、子どもたちの多様な価値観を引き出し、円滑に交流できるようになってきた。また、学級内や国境を超えた友達との交流においては、違和感や差異を痛切に感じながらも、徐々に異己を理解しようとする児童・生徒の姿が確認されてきた。これからの異己プロジェクトの推進に手掛かりを得ることができた。

一方で、限定された時間の中で、児童・生徒がどのように異己にかかわればよいのか、どのように共に考え、生活しようとする徴候が見られるかについては明確な回答を得られなかった。今後の異己プロジェクトの課題としてとらえたい。

4.2 今後の見通し

2017年度から、異己プロジェクトに韓国の研究者と実践者が加わることになった。名実ともに日本・中国・韓国の国際共同研究が立ち上がった。今後は三カ国、また多様な学校種において、実践を積み上げ、実践の知を創出していく予定である。そうすることで、異己プロジェクトは所期の目的を達成することになると考える⁴⁾。

その他、姜英敏の共同研究者である山本登志哉他の研究グループにも注目し、その研究成果を精緻に分析する必要がある。姜英敏・山本登志哉グループは、日本・中国・韓国の文化の差異に対して心理学のアプローチから迫り、重厚な実践研究の成果を公表している。異己プロジェクトの方向を見定めるためにも、次の研究課題としたい。

本研究は、JSPS科研費17H02696（基盤研究(B)）「日・中・韓三カ国協働による「異己」理解共生を旨とした国際理解教育のプログラム開発」の助成を受けたものである。

注

- 1) 2017年度は、JSPS科研費17H02696（基盤研究(B)）「日・中・韓三カ国協働による「異己」理解共生を旨とした国際理解教育のプログラム開発」（以下、異己プロジェクト）と公文助成財団「日中共同『異己』理解共生授業プロジェクト」からの資金助成を受けている。
- 2) 日本と中国における「所有」の差異については、これまでの異己プロジェクト内でのフリーターキングや日中の留学経験者からの聞き取り等で浮き彫りになってきた課題である。
- 3) 日本と中国（北京）の児童に事前にアンケートをとり、その結果を集計し、また理由をそれぞれ日本語と中国語に翻訳し、両国の児童同士が対話できるような条件整備を行った。
- 4) 今後、【場面1】や【場面2】のような事例を増やすこと、教材としてアニメやマンガ、読み物資料なども開発することを視野に入れている。

引用・参考文献

- ① 大津和子編『日韓中でつくる国際理解教育』（明石書店）、2014
- ② 釜田聡・姜英敏「日本・中国『異己』理解共同授業プロジェクトの概要」日本国際理解教育学会編『国際理解教育』Vol.20、明石書店、2014、pp.96-100
- ③ 永田佳之・釜田聡「日中共同『異己』理解共生授業プロジェクトの概要」日本国際理解教育学会編『国際理解教育』Vol.22、明石書店、2016、pp.100-105
- ④ 日本国際理解教育学会・国際委員会編『日中共同『異己』理解共生授業プロジェクト報告書』2017

- ⑤ 伊藤貴史「総合的な学習の時間における国際理解教育の授業実践－日中共同「異己」理解・共生プロジェクトを通して－」『教育実践研究 第27集』2016, pp.247-252
- ⑥ 山本登志哉『文化とは何か, どこにあるのか－対立と共生をめぐる心理学』新曜社, 2015
- ⑦ 日本国際理解教育学会編著『グローバル時代の国際理解教育－理論と実践をつなぐ－』明石書店, 2010
- ⑧ 日本国際理解教育学会編著『現代国際理解教育事典』明石書店, 2012
- ⑨ 日本国際理解教育学会編『国際理解教育ハンドブック』明石書店, 2014

Research on practicing education designed for the understanding and coexistence of “IKO”

Satoshi KAMADA*

ABSTRACT

Designated as 17H02696 (fundamental research B) and funded by a grant-in-aid for scientific research by the Japan Society for the Promotion of Science (JSPST), this project is positioned as the comprises basic research for the “development of an educational program designed for the international understanding and coexistence of the ‘IKO’ through the collaboration of three countries: Japan, China, and South Korea” (hereafter referred to as the ‘IKO project’). In this study, we aim to bring out the characteristics of the IKO project by examining previous research results and related studies and to confirm the direction of future research activities.

In this study, we first organized the history of research on the IKO project. Subsequently, we selected research results related to the IKO project and clarified their its characteristics with reference to the project's its objectives.

Based on our analysis, we confirmed that previous research and related studies were mostly practical, research that focusing on the difference in value judgments by students in East Asia. In class practice in the classroom, however, we were not able to confirm the accumulation of a sufficient amount of practical research on the recovery of damaged relations and the approach for coexistence approach. Therefore, we indicate that the main characteristic goal of the IKO project is to incorporate the approach for coexistence into the program through class practice.

* School Education